

ピアホームだより

2022. 8. 10

昨今の激動の中で —障がい者と戦争—

ロシアがウクライナ侵攻。民族・国家の歴史を背景としたプーチンの思い込みがあるようだが、何があろうとも他国の侵略を正当化できるものではない。

通常、戦争は経済的利害をベースに発生するものだと思いますから、NATO との対立という大きな視点での分析も考えられますが、ウクライナ侵攻は、極めて異質なプーチン個人の汎ロシア主義ともいえる拡張主義で戦争に突入したように思います。

折しも、参議院選挙の最中に、安倍元首相への銃撃事件が発生し、死亡に至るといった衝撃的な事件も起きました。

コロナ・地球温暖化—自然界も人間の営みの悪影響で乱れに乱れ、混沌とした世の中になって来ました。

今や、第3次世界大戦も辞さずという乱暴な議論がされている時代です。

そこまで言わずとも、防衛費2倍を高らかにぶち上げる政党の方が国民の支持を集めるといふ異常な世論の空気になって来ました。

そこで、今回は、障がい者と戦争という視点で考察してみたいと思います。

NHK アーカイブで、第2次世界大戦を経験した障害者の経験・証言を観ることが出来ました。異口同音に言っていることは、

- 1 障がいがあるため、兵役不合格となり悲しい思いをした。
- 2 それは、同時に極潰しという悪罵を投げつけられることに繋がり、肩身の狭い思いをして生きていた。
- 3 ある障害者は、軍需工場で、生産活動に従事することが出来た。私も、お国もために役立つことが出来ると人一倍頑張ったが、終戦になったら、いの一番に解雇され、路上に投げ出された。
- 4 今は平和な時代かもしれない。でも、生産性の上がる人が評価される基調は変わらず、障がい者は戦時中と変わらず役立たずとして扱われているのではないかと？

というような内容だった。

ナチス政権となったドイツでは、ユダヤ人の虐殺が起こる前に、精神神経学会が先導して、精神障害者をガス室送りにしました。

その時の標語は、“恵みの死”です。

障がい者は死んだ方が幸せだという事です。

日本でも断種が行われ、余裕のない戦時下では、優生思想に基づく劣った遺伝子を断つということが行われて来ました。

私も、社会資源不足の中、時に、障がい者支援が負担になる気持ちが沸き上がることを否定できません。

人間は、自分勝手？本当に、悲しい事です。

先日の参議院選挙で、改憲派2/3を超え、後に、日本の針路にとって大きな岐路と称されるとされる選挙結果になりました。

障がい者の皆様も、是非一票を投じて頂きましたのですが、よく分からないという事で、行かなかった方が多かったと思います。

地域生活、社会参加とは、こうして一票を投じることから始まりませんか？障がい者にとっての政治は特に大事なのだから。

今月の予定

8月17日：虐待防止講習(森田先生)